

特徴的な行動分類を用いて、7 都道府県の小 5・6 年生および中学 2・3 年生の生活時間を明らかにしている。しかし、その後の調査が行われておらずデータとして古くなっていることや欠落する学年があるといった課題がある。

本調査は、小 5 生から高 2 生を対象に全国規模のサンプリングで調査を行うことによって、上述した先行研究では明らかにされていない属性別の分析を充実させている点に特長がある。

(3) 本報告の構成

本報告は、以下の流れに沿って行う。

第 2 節では、調査の実施概要を示す。

第 3 節では、主な調査結果について報告する。第一に、「24 時間調査」の結果を用いて、学年により時間の使い方がどう推移するのかを確認する。ここでは、全体像の把握をめざす。第二に、性別、地域別、親の学歴別、成績別に、子どもの時間の使い方がどのように異なるのかを検討する。時間の使い方は、性による志向の違いに加えて、居住地域のような物理的な制約によっても変わると推察される。また、保護者の子育て戦略ともかかわって、家庭的な背景による違いも大きいだろう。こうした今日的な課題について検討したい。

第 4 節では、学習行動に注目をし、子どもの成績を規定するのが「勉強時間」といった量的な要素なのか、それとも「勉強方法」といった質的な要素なのかを考察する。時間の多寡だけを問題にするのではなく、どのように時間を使うのが効果的なのかという問題について、学習行動を取り上げて試論的な分析を行いたい。

第 2 節 調査概要

(1) 調査方法・対象

- ①調査方法：郵送法による自記式質問紙調査
- ②調査時期：2008 年 11 月 10 日（月）～14 日（金）
- ③調査対象：全国の小学 5 年生～高校 2 年生 8,017 名

	小学生		中学生			高校生		合計
	小 5 生	小 6 生	中 1 生	中 2 生	中 3 生	高 1 生	高 2 生	
配布数(名)	3,672	3,675	3,672	3,674	3,674	3,674	3,675	25,716
有効回収数(名)	1,339	1,264	1,243	1,183	1,166	948	874	8,017
	2,603		3,592			1,822		
有効回収率(%)	35.4		32.6			24.8		31.2

注 1) 調査対象者は、ベネッセコーポレーションが保有するリスト（会員・非会員を含む）に基づいて無作為に抽出した。

(2) 調査項目

- ①24 時間調査：平日 24 時間の生活

記入方法は以下の通り。

- 1) 11 月 10～14 日のうち 1 日を選んで、その日の午前 4 時から翌日の午前 4 時までに行ったことを 15 分単位で回答。

- 2) 回答の際には、あらかじめ指定した 28 の行動分類から行動を選択。
3) 2 つ以上の行動を同時に行っていた場合は「おもにしたと思うもの」を 1 つ選択。

② アンケート調査：生活時間や時間の使い方に対する意識

主な調査項目は以下の通り。

ふだんの生活時間／習い事／学校外の学習機会／学習塾の利用／部活動（中・高校生のみ）／アルバイト（高校生のみ）／増やしたい時間／楽しい時間・つらい時間／時間のすごし方／時間の使い方の点数（自己評価）家族と決めている時間のルール／1 年間にすること／将来について／日本社会について／心や身体の疲れ／成績の自己評価／希望する進学段階など

(3) 本調査の特徴・留意点

	長所	短所
24 時間調査	<ul style="list-style-type: none"> ● 24 時間の時間配分を把握できる ● 行動が行われた時間帯を把握できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 同時に行われている行動（いわゆる「ながら行動」）を把握できない ● 15 分より短い時間で行われる行動を把握できない ● 回答日の行動のみに限定される（毎日行われる行動でないものはとらえにくい）
アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ● 同時に行われている行動（いわゆる「ながら行動」）や短い時間で行われる行動を把握できる ● 週単位や年単位の活動を把握できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 行動の合計時間が 24 時間にならない ● 行動が行われた時間帯を把握できない

注 1) 11 月中旬の平日の生活をとらえたものであり、休日についてはたずねていない。

注 2) 特に 24 時間調査については、日照時間が短い時期であることや、受験を控えた学年にとって試験に近い時期であることが、行動に影響を与えている可能性がある。

第 3 節 主な調査結果

(1) 24 時間の使い方（平均時間）

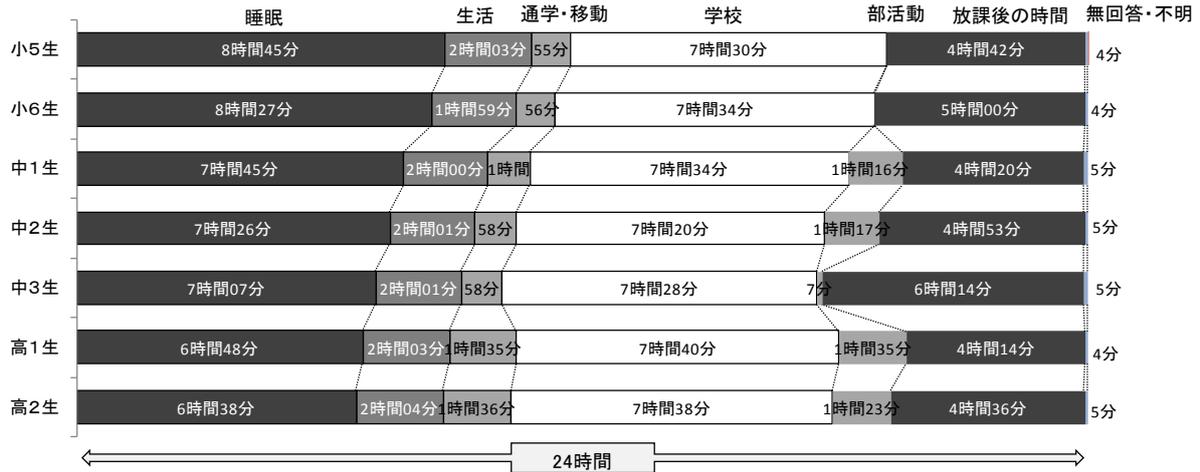
① 1 日の時間配分

最初に、子どもたちの 24 時間の使い方について概略を示しておこう。本調査の対象は 7 学年にまたがっているのので、学年や学校段階による違いをみることができる。以下は、その主な傾向である。

次ページの図 1 から分かるのは、以下の 4 点である。

- 1) 「睡眠」時間は学年とともに減少する。小 5 生の平均は 8 時間 45 分だが、高 2 生では 6 時間 38 分と 2 時間も少ない。
- 2) 身の回りのことや食事などの「生活」に費やす時間は、2 時間前後である。また、「学校」にいる時間（部活動を除く）は 7 時間 30 分前後である。これらは、学年による違いがほとんど見られない。

図 1 1 日の時間配分



注 1) 部活動は中・高校生のみにあずねた。

注 2) 放課後の時間は、遊び、勉強、習い事、メディア、人と過ごす、その他の時間の合計。

注 3) 放課後の時間として示した活動のわずかの部分は、放課後以外の時間にも行われている。

3) 中 1・2 生、高 1・2 生は、部活動に 1 時間 20～30 分程度の時間を費やす。

4) 上述したような「生理的に必要な時間」（睡眠や生活）や「拘束性の高い時間」（通学・移動、学校、部活動）をのぞいた「放課後の時間」は、おおよそ 4～5 時間程度である。中 3 生だけが、6 時間 14 分と長い。

1 日のうちで、「生活」「通学・移動」「学校」の時間は、どうしても一定の時間を費やす必要がある。そのようななかで、「部活動」がある学年の生活はどうしても窮屈になる。子どもたちは、「放課後の時間」を確保するために、「睡眠」の時間を削っているように見える。とくに、小 6 から中 1 にかけては 40 分、中 3 から高 1 にかけては 2 時間、「放課後の時間」が減少する。短い時間のなかで活動をやりくりしなければならなくなるという点で、学校段階の変わり目は留意が必要と考えられる。

② 「放課後の時間」の内訳

次に、図 2 を用いて、放課後の時間の内訳を見てみよう。ここからは、次の 4 点が読み取れる。

1) いずれの学年でも、放課後の時間の半分以上を「勉強」と「メディア」が占める。

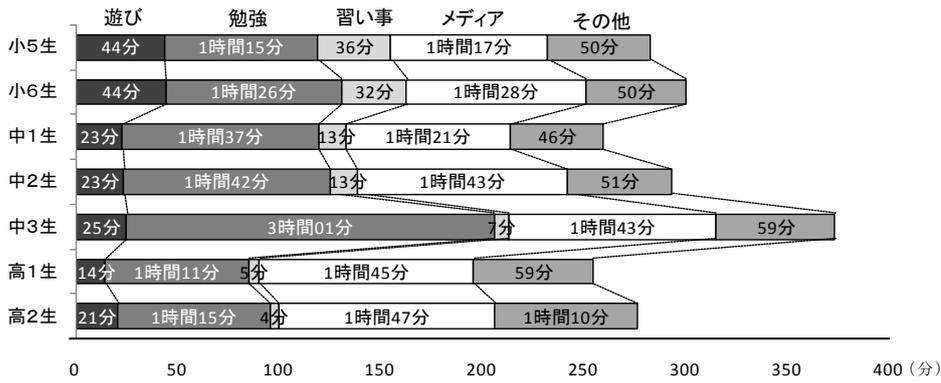
2) 「遊び」の時間は、小学生が 40 分台でやや長めだが、中学生になると 20 分台に減少する。また、「習い事」の時間は、小学生が 30 分台だが、中学・高校生は 15 分以下と短い。これらは学年が上がるとともに時間が減少する活動である。

3) 「勉強」の時間は、中 3 生を除いて、いずれの学年も 1 時間 10～40 分程度である。学年による変化は、あまり大きくない。ただし、多くの生徒が高校受験を控える中 3 生は約 3 時間で、他の学年の 2 倍前後にまで増える。

4) 「メディア」の時間は、中 1 生以下では 1 時間 20 分前後だが、中 2 生以上では 1 時間 40 分前後と、わずかに増加する。しかし、大きな変動はみられない。

以上がそれぞれの活動についてのおおまかな学年推移であるが、活動によってはさらにその内訳が学年によって異なるものがある。そのいくつかを補足する。

図 2 「放課後の時間」の内訳



注 1) 「その他」には、「その他」のほかに「人と過ごす」時間が含まれる。

図 3 「遊び」の時間の内訳

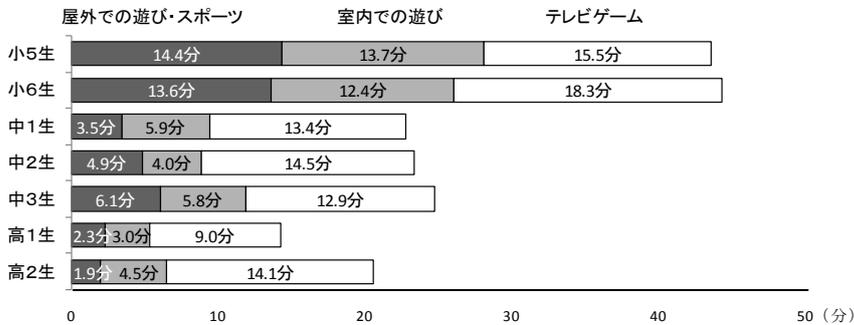
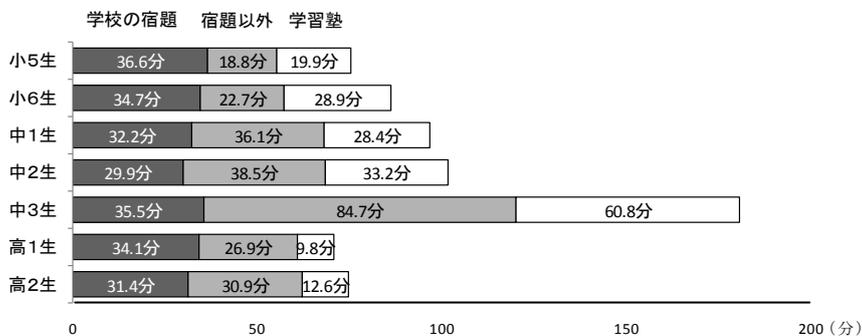


図 4 「勉強」の時間の内訳



③ 「遊び」の時間の内訳

「遊び」の時間は小学生で長く、学年があがるにつれて短くなる傾向がある（図 3）。そのなかでも、「屋外での遊び・スポーツ」と「室内での遊び」の2つが、小6生から中1生にかけて大きく減少する。部活動による放課後の時間の減少が、この2つの活動に影響を及ぼしているようだ。これに対して、「テレビゲーム」はわずかに小学生が長い、学年による違いはそれほど大きくない。

④ 「勉強」の時間の内訳

続いて、「勉強」の時間の内訳である。図 4 をみると、「学校の宿題」の時間は、30～35分前後で推移して、学年による差が小さいことがわかる。これに対して、「宿題以外の

図 5 「メディア」の時間の内訳

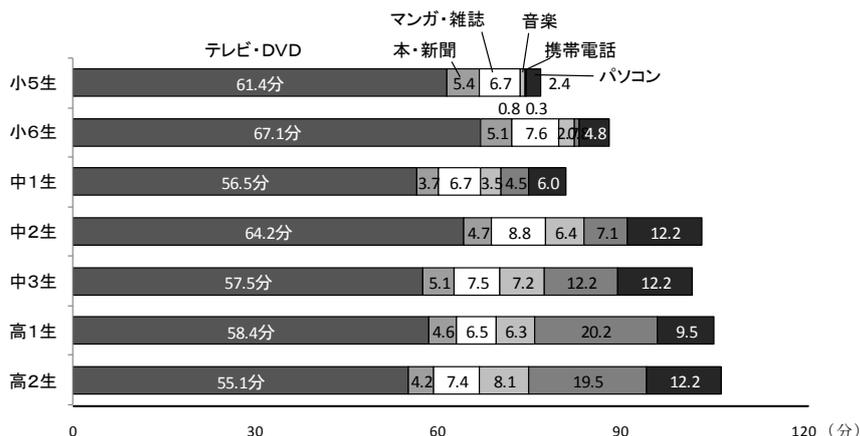
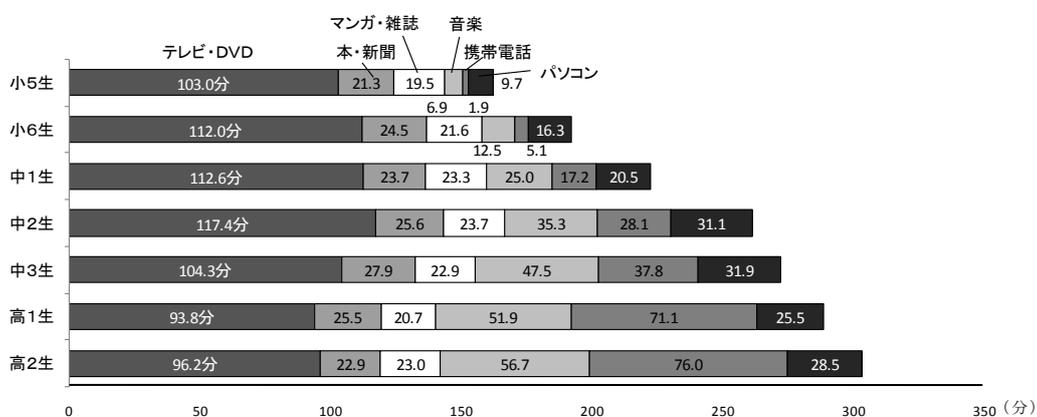


図 6 「メディア」の時間（アンケート調査の結果）



注 1) 平均時間は、「しない」を 0 分…「4 時間」を 240 分、「4 時間より多い」を 300 分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

勉強」は、小 5 から中 3 まで増加する。とりわけ、受験を直前に控えた中 3 生の時間が長い。しかし、高校生になると、ふたたび 30 分程度にまで減少する。「学習塾」の時間も、ほぼ同様の推移を示す。ただし、これは通塾率と連動しており、通塾率の上昇に伴って平均時間が増加していると考えられる。

⑤ 「メディア」の時間の内訳

最後に、「メディア」の時間の内訳（図 5）である。もっとも長い時間を費やしているのは、いずれの学年も「テレビ・DVD」である。60 分前後の時間で推移しており、学年による変化はそれほど大きくない。「本・新聞」「マンガ・雑誌」などの活字メディアは 5～10 分程度の学年が多く、時間は短い。これらも学年による変化は小さい。これに対して、「携帯電話」は、学年が上がるにつれて使用時間も長くなる。とはいえ、携帯電話も所有率が影響を与えている可能性が高い。「パソコン」を使う時間は、小 5 から中 2 までは線形に増加するが、それ以降の学年では増加しない。

ちなみに、図 5 で示したのは、24 時間調査の結果であるため、「ながら行動」はデータとして取りにくい。そこで、図 6 にアンケート調査の結果を示した。増減の傾向は 24 時間調査の結果と同様だが、いずれの活動についても接している時間は長い様子が表れている。

(2) 時刻別行為者率

ここまで、子どもたちの時間の使い方について、平均時間を用いて検討してきた。それにより、各活動の時間を量的に把握することができた。本調査は、量的な把握に加えて、それぞれの活動を「いつ」行っているかがわかるところに特徴がある。ここでは、各活動が行われている時間帯にまで踏み込んで、子どもたちの時間の使い方を立体的にとらえたい。さらには、そこから見出される課題について検討する。

①小学生

図7は、小学5・6年生の時刻別行為者率である。横軸に午前4時から翌日の午前4時までの時刻を、縦軸にその行動を行った子どもの比率を示している。16時に「移動」のピークがあり、この時間を中心に子どもたちが下校していると推察される。また、19時に「生活」のピークがあるが、多くの子どもが夕食をとっているようだ。そして、22時には6割くらいの子どものみがすでに就寝していることがわかる。

図7 時刻別行為者率 (小学生)

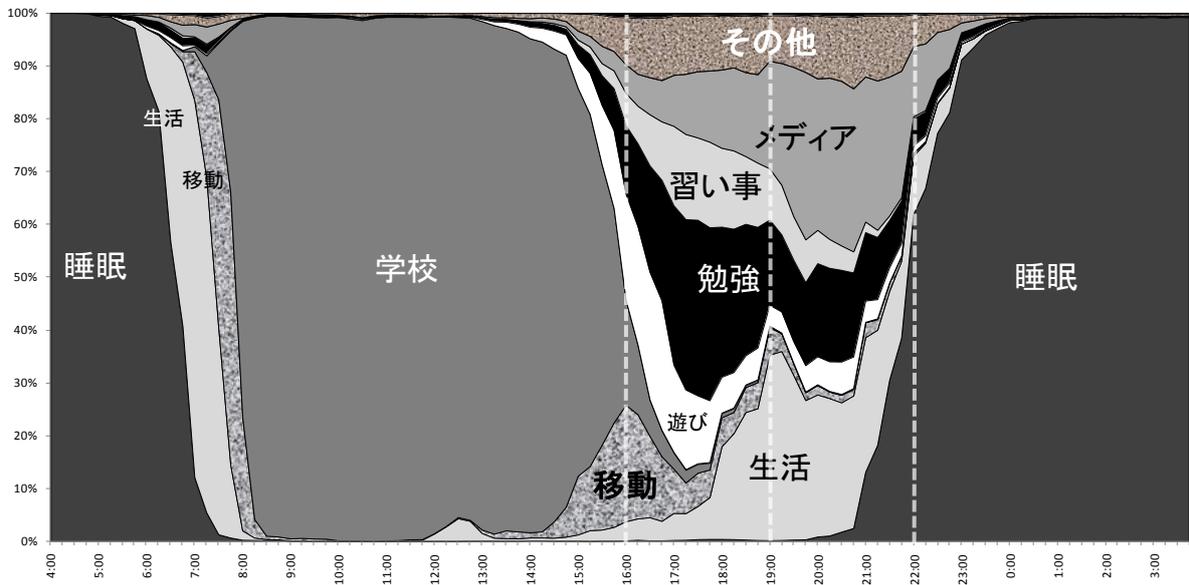
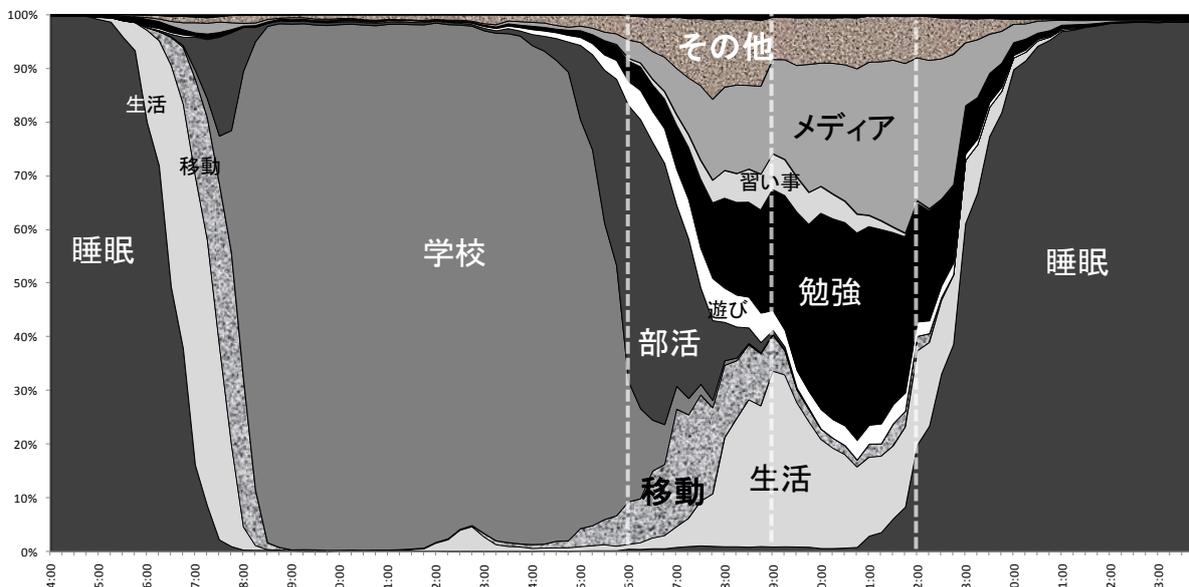


図8 時刻別行為者率 (中1・2生)



小学生の特徴は、夕食前にさまざまな活動をしているところにある。「勉強」の中心は17～18時の間であり、「遊び」や「習い事」も一定の割合で出現している。そして、夕食後は「メディア」と「生活」（入浴など）の比率が高まる。

②中1・2生

それでは、中学に入学すると、子どもたちの生活はどう変わるのだろうか。図8に中1・2生の結果を示した。ここからは、「部活動」が生活時間の変化に大きな影響を与えている様子が見て取れる。夕食前（19時前）の活動の多くを「部活動」が占め、「遊び」や「習い事」の面積がかなり小さくなっている。さらに、「勉強」の時間が夕食後にスライドしている。夕食前に勉強をする時間が取れないため、中1・2生の勉強時間のピークは21時ごろになる。

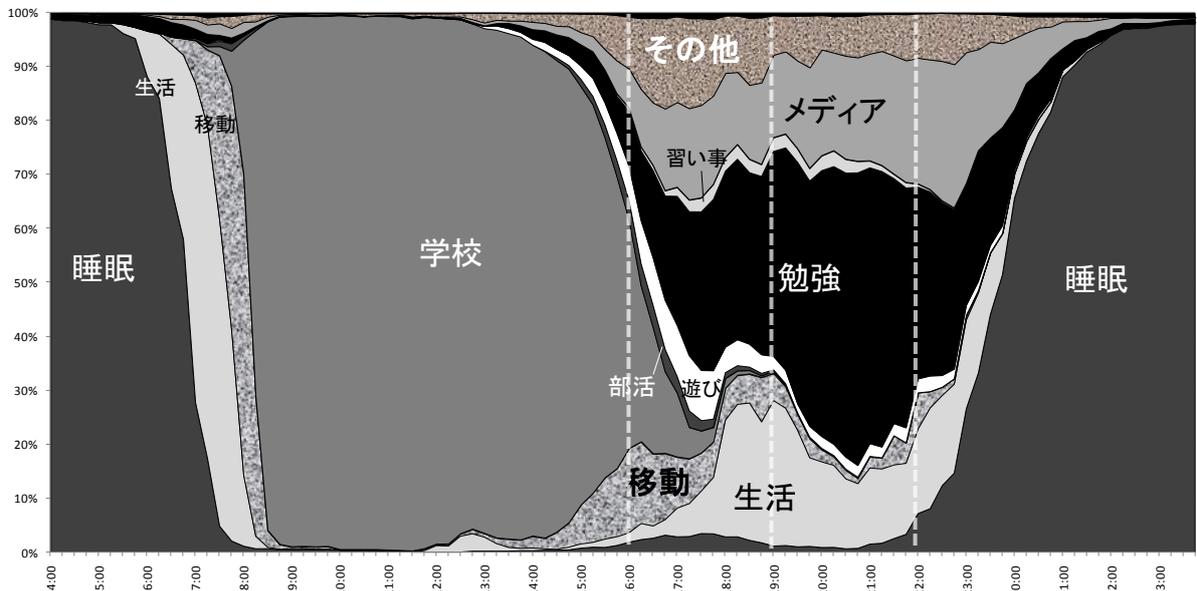
このように、「部活動」が出現したために、それぞれの活動が後ろ倒しになる様子がみられる。22時の時点で小学生は61.9%が就寝しており、「メディア」は13.3%、「勉強」は5.1%の行為者率でしかない。しかし、中1・2生の「睡眠」は19.8%であり、「メディア」26.6%、「勉強」22.2%、「生活」17.6%と、まだ多くの子どもが起きて活動している。中1・2生では、6割の子どもが就寝するのは23時である。

活動が行われている時間帯まで視野に入れると、中学入学とともに子どもの生活リズムが大きく変わることが読み取れる。「部活動」の影響で自由に使える放課後の時間が減少し、その結果、「勉強」や「メディア」の時間が遅くなる。さらに、それが「睡眠」時間の削減につながる。中1生には、そうした悪循環に陥らないための働きかけが必要とも言えるかもしれない。

③中3生

つづいて、図9から中3生の結果をみてみよう。中3生も、生活が劇的に変わる。まず、「部活動」がかなり縮小し、その時間の多くを「勉強」が埋める。全般に、夕食の前後を問わず「勉強」の行為者率が高い。18時前後の時間帯は3割が、21時前後の時間帯は過半数が勉強している。次に多い活動は、「メディア」にかかわるものである。図2でも確認したように、高校受験直前である中3生でも、「メディア」の時間は減少しない。

図9 時刻別行為者率（中3生）



④高校生

最後に、高校 1・2 年生の時刻別行為者率 (図10) である。高校生になると再び、「部活動」に参加する割合が増える。16時から19時までの時間帯の中心は「部活動」である。さらに見逃せないのが、「移動」の時間の増加である。16時から20時まで1～2割で推移し、特定の時刻に集中しているわけではないが、小中学生と比べると面積が広い。この移動時間によって、その後の時間の活動が圧迫されている様子がうかがえる。

19時以降の活動をみると、中学 3 年生に比べて「メディア」「勉強」の時間ともに、ピークは22時ごろである。このように活動の中心時間帯がスライドすることが、「睡眠」の時間の後ろ倒しにつながっている。「睡眠」が5割を超えるのは、0時である。さらに注目したいのは、「部活動」の再開や「移動」時間の増加による影響が大きいのは、「勉強」の時間に対してであり、「メディア」にはほとんど影響を与えていない点である。放課後に使える自由時間の減少がもたらす影響は、「メディア」ではなく「勉強」に表れている。

⑤時間の使い方における課題

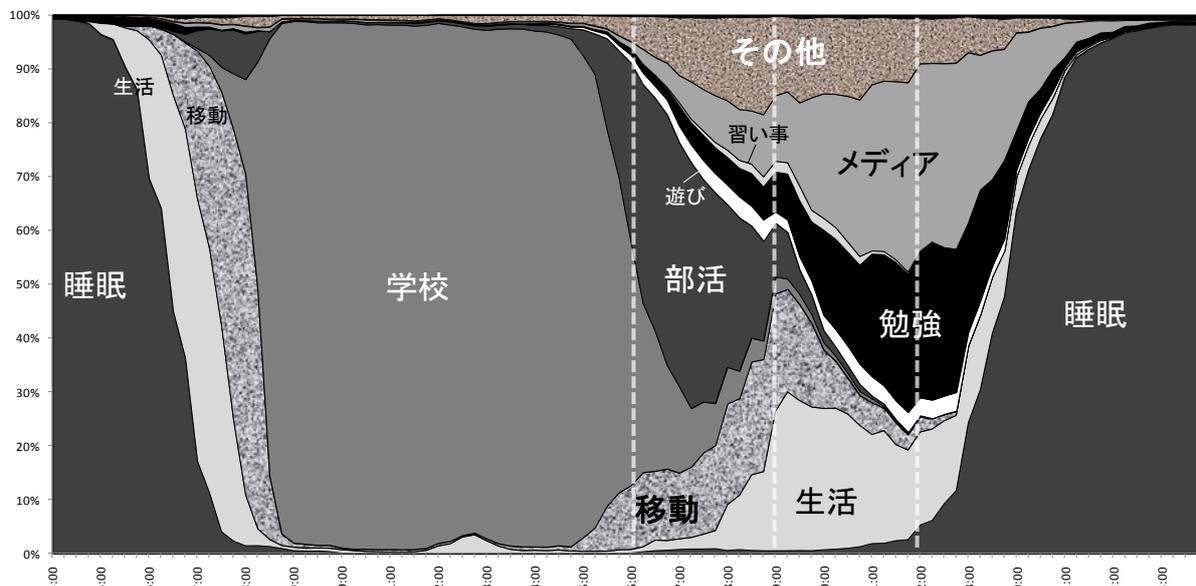
以上、小学生、中学生 (1・2 年生と 3 年生)、高校生の時刻別行為者率をみてきた。ここで学校段階や学年ごとの特徴や課題をまとめておこう。

1) 16時以前の活動は、学校段階や学年による違いは少ない。6～7時まで「睡眠」が多く、その後に「生活」「移動」があり、8～9時以降は「学校」にいる時間となる。「学校」が終わる時間は、いずれの学年でも15～16時が多い。

2) 「部活動」の有無により、放課後の自由時間が短くなると同時に、各活動が行われる時間帯が遅くなる。その影響で「睡眠」時間が遅くなる結果をもたらす。「部活動」が始まる中1生や、「部活動」が再開する高1生に生活の大きな変化がみられ、生活リズムの乱れという点での注意が必要な学年だということができる。

3) 時間相互の関連という点では、「部活動」によってもっとも影響を受けるのは「勉強」の時間である。小6から中1では、「勉強」が行われる時間帯が夕食前から夕食後に移動する。また、「部活動」がなくなる中3では「勉強」の時間が大きく増加した後、高1で

図10 時刻別行為者率 (高校生)



「部活動」が再開すると「勉強」時間が顕著に減少する。小学生→中1・2生→中3生→高校生と通して図を眺めてみても、時間量（図における面積）と時間帯の双方の変化によってもっとも形が変わるのは、「勉強」の時間である。

こうした変化に加えて、小6から中1では「習い事」や「遊び」の時間の減少がみられる。放課後の時間が圧縮されることの影響もあるが、「部活動」はそうした習い事や遊びの機能を有しているのかもしれない。

4)放課後の時間のなかでもっとも変化が小さいのは、「生活」と「メディア」の時間である。「生活」はいずれの学年でも、19時ごろにピークがあり、21時頃まで1割前後が出現している。夕食をとり、入浴する時間帯なのだろう。また、「メディア」は夕食後に2～3割程度の行為者率で出現している。今の子どもたちにとって、「メディア」の時間は欠かせないものなのかもしれない。

*

*

*

ここまで、子どもたちの時間の使い方について、平均時間と時間帯の両面から検討してきた。その際に、主に学年による違いに注目した。上記の分析からは、学年（発達）による時間の使い方の変化がわかるとともに、時間相互の関連も明らかにすることができた。しかし、次のような点については十分な説明ができていない。

第一は、活動時間のちらばりがどうかという点である。「学校」の時間のように、ほとんどの子に一定時間が必須である活動は子どもによる差が小さいと推察される。しかし、「部活動」や「習い事」「学習塾」「アルバイト」のように、行為者は長時間だが、その活動をしていない子どもは「0分」というような活動もある。また、「携帯電話」や「テレビゲーム」のように、所有状況が時間に影響を及ぼす活動もある。これらの活動の場合、平均時間は行為者率（その活動をした人の割合）や所有率が直接的に影響する。たとえば、「習い事」の時間は、小学生から中学・高校生にかけて減少するが、これは行為者の減少が直接影響している可能性が高い。

さらに、ほとんどの子どもがその活動を行ってはいるが、子どもによって時間が異なるような活動もある。「勉強」や「メディア」は、そうした活動に該当する。このように時間（量）の分布がどうなっているのかという点も検討が必要である。

第二の課題は、属性による違いがわからないという点である。平均時間だけでは、その活動の時間が長い（短い）のが誰なのかまでは分からない。また、時刻別行為者率も属性ごとにみないと、子どもによる時間の使い方の違いを把握することができない。重要なのは、特定の属性の子どもたちに時間の使い方の特徴がみられるかという点である。

本報告では時間的な制約から、第一の分析は他の機会に譲り、第二の点に注目して分析を行う。主に属性ごとの平均時間を取り上げ、そこから子どもによる時間の使い方の違いについて検討をしていきたい。

（3）時間の使い方の差－属性による違い

前項では、時間の使い方（平均時間・時刻別行為者率）が、学年や学校段階でどのように異なるのかを明らかにした。そこで、本項ではそれ以外の要因について取り上げる。ここでは、中学生のデータを用いて、29項目にわたる行動分類のどこに差が表れているのかを明らかにする。

表 1 活動の平均時間 (性別、中学生)

		性別			有意差
		男子		女子	
		1655名		1895名	
生活	睡眠	457.2	>	437.3	***
	身の回りのこと	54.8	<	69.5	***
	食事	57.3		58.7	
移動	通学	46.2	<	48.2	+
	移動	12.1	>	10.4	+
学校	学校	438.9		435.0	
	放課後	9.6	<	11.7	+
	部活動	55.4		53.1	
遊び	屋外での遊び・スポーツ	7.2	>	2.7	***
	室内での遊び	7.3	>	3.5	***
	テレビゲーム	22.6	>	5.7	***
勉強	家での勉強(宿題)	30.0	<	34.8	**
	家での勉強(宿題以外)	48.5	<	56.1	**
	学習塾	43.7	>	37.5	*
習い事	習い事・スポーツクラブ	10.1		9.0	
	習い事の練習	1.1	<	2.6	***
メディア	テレビ・DVD	57.2	<	61.3	+
	本・新聞	4.7		4.4	
	マンガ・雑誌	7.0		8.0	
	音楽	4.8	<	6.5	**
	携帯電話	4.6	<	10.8	***
	パソコン	10.7		9.4	
人と過ごす	家族と話す・過ごす	10.1	<	11.5	+
	友達と話す・過ごす	4.5	<	7.6	**
その他	家の手伝い	2.5	<	5.3	***
	買い物	1.5	<	3.0	**
	からだを休める	18.7	<	21.4	*
	ペットと過ごす	1.7	<	2.5	*
	その他	5.5		6.9	
	無回答・不明	4.5		5.7	

注 1) 数値はいずれも平均時間 (分)

注 2) 有意差 (t 検定) は、以下の危険率で差があることを示す。

***=0.1%未満、**=1%未満、*=5%未満、+=10%未満。

①性による違い

最初に、性によって活動がどのように異なるのか各活動の平均時間を性別に示した。有意差のある項目が多く、性によって好む活動が異なることが明らかである。差となって表れているのは、主に以下のようなところである。

1) 「生活」にかかわる時間では、男子は「睡眠」が長く、女子は「身の回りのこと」が長い。

2) 「勉強」の時間は、「家での学習(宿題/宿題以外ともに)」は女子に長く、「学習塾」は男子に長い傾向がある。女子は家庭で自律的に学習ができるということや、保護者の教育投資が男子に対して積極的といったことが影響しているのかもしれない。

3) 「遊び」の時間は、総じて男子が長い。とくに

「テレビゲーム」の時間が異なる。男子は女子の4倍の長さである。ただし、これは男子に行為者が多いことも影響している可能性がある。そこで、行為者のみに限って平均時間をみたところ、男子は75.5分、女子は56.5分であった。1.3倍程度の差に縮まるが、時間差はやはり20分程度ある。

4) 「遊び」に代わって女子が多く費やしているのは「メディア」の時間である。「テレビ・DVD」「音楽」「携帯電話」などは、女子に長い。余暇時間の過ごし方の志向が、男女で異なっていることがわかる。

5) 有意差がみられないのは、「食事」「学校」「部活動」など29項目中7項目と少なかった。学校生活にかかわる部分に関しては男女の差は小さいが、個人の嗜好が反映されやすい項目のほとんどに性差が表れている。中学生の段階からすでに、性によって生活が異なる状況が生まれているようだ。

②地域による違い

次に、時間の使い方が地域によって異なるのかを確認しよう。今回の調査では、回答者に居住する市区町村名をたずねている。この回答を、『統計でみる市区町村の姿 2008』(総

表 2 活動の平均時間 (地域別、中学生)

		地域別			
		特別区・ 指定都市 840名		人口5万人 未満 609名	有意 差
生活	睡眠	449.7		446.5	
	身の回りのこと	63.0		63.9	
	食事	59.4		57.3	
移動	通学	48.9		46.7	
	移動	12.4	>	8.4	**
学校	学校	419.6	<	451.5	***
	放課後	10.0		11.8	
	部活動	56.1		54.7	
遊び	屋外での遊び・スポーツ	7.5	>	3.1	**
	室内での遊び	5.2		4.6	
	テレビゲーム	14.5		11.4	
勉強	家での勉強(宿題)	24.1	<	40.4	***
	家での勉強(宿題以外)	58.3	>	45.7	**
	学習塾	47.4	>	29.7	***
習い事	習い事・スポーツクラブ	8.5		9.1	
	習い事の練習	2.1	>	0.4	***
メディア	テレビ・DVD	58.3		63.9	
	本・新聞	4.2		4.2	
	マンガ・雑誌	8.6		7.7	
	音楽	5.4		5.3	
	携帯電話	7.3		7.3	
	パソコン	10.2		10.5	
人と過ごす	家族と話す・過ごす	11.3		11.4	
	友だちと話す・過ごす	6.0		5.9	
その他	家の手伝い	3.6		4.6	
	買い物	2.2		2.3	
	からだを休める	21.7		19.4	
	ペットと過ごす	2.1		2.5	
	その他	6.1		5.2	
	無回答・不明	6.0		4.6	

注 1) 数値はいずれも平均時間 (分)

注 2) 有意差 (t 検定) は、以下の危険率で差があることを示す。

***=0.1%未満、**=1%未満、*=5%未満、+=10%未満。

注 3) 人口 15 万人以上 (特別区・政令市を除く) の自治体と、
 人口 5~15 万人未満の自治体のデータは省略した。

に、生活時間の地域差が小さくなっていることは、今日的な傾向といえるかもしれない。

2) そのなかで差が表れたのは、「学校」と「勉強」にかかわる項目である。「学校」にいる時間は、人口 5 万人未満の自治体に住む中学生のほうが 37.9 分も長い。さらに興味深いのは、「家での勉強 (宿題)」の時間も人口 5 万人未満のほうが 16.3 分長いことだ。これに対して、特別区・指定都市では、「家での勉強 (宿題以外)」や「学習塾」の時間が長い傾向がある。地方では学校での学習や宿題の比重が大きく、都市部では校外学習の比重が大きいことがわかる。地域によって校外学習のリソースが偏在することを示す結果とも言えるし、学校の果たす役割が地域によって違うことを示す結果とも言えるのではないだろうか。

③親学歴による違い

つづいて、家庭的な背景の影響を確認しよう。ここでは、親の学歴を変数として用いる。学歴をはじめとする文化階層や世帯収入などの経済階層によって教育や子育てに対する意

務省統計局、2008 年データ) の自治体人口規模に基づいて、「特別区・指定都市」「人口 15 万人以上」「人口 5~15 万人」「人口 5 万人未満」の 4 つにタイプ分けした。ここでは、都市部と想定される「特別区・指定都市」に住む中学生と農村部が多いと考えられる「人口 5 万未満」の自治体に住む中学生を取り出して比較する。表 2 からは、主に次のようなことがわかる。

1) 全体に、有意差が見られる項目が少ない。まず、「生活」にかかわる項目は、ほとんど地域差が表れなかった。それだけでなく、「メディア」「人と過ごす」「その他」など比較的自由度の高い活動にも差はみられない。さらに、「遊び」では「屋外での遊び・スポーツ」で特別区・指定都市のほうが長い傾向がみられるものの、総じて大きな差が生じているとは言えない。このよう

表 3 活動の平均時間 (親の学歴別、中学生)

		親学歴別			
		父母とも 非大卒		父母とも 大卒	有意 差
		1584名		1072名	
生活	睡眠	451.1	>	438.8	***
	身の回りのこと	61.7		62.9	
	食事	57.9		58.6	
移動	通学	44.8	<	53.5	***
	移動	9.5	<	13.3	***
学校	学校	438.0		436.9	
	放課後	10.9		10.1	
	部活動	53.3		57.7	
遊び	屋外での遊び・スポーツ	6.2	>	3.2	**
	室内での遊び	6.8	>	4.4	*
	テレビゲーム	15.5	>	10.1	***
勉強	家での勉強(宿題)	32.5		35.7	
	家での勉強(宿題以外)	46.4	<	60.9	***
	学習塾	32.2	<	47.0	***
習い事	習い事・スポーツクラブ	8.9		9.9	
	習い事の練習	1.2	<	3.1	***
メディア	テレビ・DVD	66.7	>	48.5	***
	本・新聞	4.6		5.0	
	マンガ・雑誌	7.9		7.3	
	音楽	6.5	>	4.7	*
	携帯電話	9.6	>	4.9	***
	パソコン	10.1		9.8	
人と過ごす	家族と話す・過ごす	11.2		10.7	
	友だちと話す・過ごす	6.3		4.7	
その他	家の手伝い	4.9	>	2.5	***
	買い物	2.9	>	1.5	*
	からだを休める	18.9		20.2	
	ペットと過ごす	2.1		2.2	
	その他	6.1		5.6	
	無回答・不明	5.4		6.1	

注 1) 数値はいずれも平均時間 (分)

注 2) 有意差 (t 検定) は、以下の危険率で差があることを示す。

***=0.1%未満、**=1%未満、*=5%未満、+=10%未満。

注 3) 父母のどちらか一方が大卒であるケースのデータは省略した。大卒は短大卒を含む。

ある。非大卒グループは、「遊び」の時間がトータルで 10.8 分長い。また、「メディア」のなかでも「テレビ・DVD」は 18.2 分の差がある。全体に余暇活動の時間が長い。

3) これに対して、大卒グループで長いのは「移動」と「勉強」の時間である。「通学」の時間が長いのは、大卒グループに私立中学の在学者の比率が高いことが影響している。また、小分類の「移動」時間が長いのは、通塾率が高いことと関連しているだろう。さらに、「勉強」の時間については「家での勉強(宿題以外)」と「学習塾」が長く、校外学習に積極的な様子が示されている。

高学歴の親ほど、子どもに勉強を奨励し、テレビの見すぎやテレビゲームのしすぎをコントロールしようとする。この結果から示唆されるのは、単純に勉強の時間を増やすだけでなく、それに代わって生活全体のなかでどの時間を減らすかということも考えているだろうということである。子どもが時間をどのように使うかは、そうした家庭の教育戦略の反映でもある。

識が異なることは、多くの先行研究によって示されてきた。また、実際に、それらが子どもの行動や学力などのパフォーマンスに影響を与えていることも、ここ数年における教育社会学の中心的なテーマとして取り上げられてきた(たとえば、吉川 2006、荻谷・志水 2007、浜野 2009 など)。本発表では、親の学歴が子どもの生活時間にどのような影響を及ぼすのかを改めて確認する。表 3 は、その結果である。この表では、「勉強」にかかわる時間と、「遊び」や「メディア」などの余暇時間の対比関係が鮮明に表れている。傾向を以下に列挙しよう。

1) 「生活」にかかわる時間においては、父母とも非大卒のグループで「睡眠」時間が長い。

2) 非大卒グループで時間が長いのは、「遊び」と「メディア」にかかわる時間で

表 4 活動の平均時間 (成績別、中学生)

		成績別			有意差
		成績上位		成績下位	
		1495名		935名	
生活	睡眠	443.0	<	451.0	**
	身の回りのこと	64.6	>	59.6	***
	食事	59.1		57.0	
移動	通学	46.6		48.5	
	移動	13.0	>	9.7	**
学校	学校	441.1	>	429.1	***
	放課後	9.5		11.1	
	部活動	56.3	>	51.1	+
遊び	屋外での遊び・スポーツ	3.5	<	7.8	**
	室内での遊び	4.0	<	7.6	**
	テレビゲーム	12.2	<	15.8	*
勉強	家での勉強(宿題)	31.6		33.6	
	家での勉強(宿題以外)	62.0	>	37.8	***
	学習塾	48.5	>	28.1	***
習い事	習い事・スポーツクラブ	10.0		7.9	
	習い事の練習	2.5	>	0.8	**
メディア	テレビ・DVD	49.6	<	73.2	***
	本・新聞	4.7		4.4	
	マンガ・雑誌	7.0	<	8.9	*
	音楽	4.8	<	7.1	**
	携帯電話	5.1	<	11.9	***
	パソコン	9.4	<	11.9	+
人と過ごす	家族と話す・過ごす	9.5	<	12.5	**
	友だちと話す・過ごす	4.6	<	9.2	***
その他	家の手伝い	3.4	<	5.7	**
	買い物	1.7	<	3.1	*
	からだを休める	19.8		19.7	
	ペットと過ごす	1.9	<	2.9	*
	その他	5.7		7.3	
	無回答・不明	5.5		5.7	

注 1) 数値はいずれも平均時間 (分)

注 2) 有意差 (t 検定) は、以下の危険率で差があることを示す。

***=0.1%未満、**=1%未満、*=5%未満、+=10%未満。

注 3) 成績について「真ん中くらい」と回答したケースのデータは省略した。

④成績による違い

最後に、学校の成績によって生活時間がどのように異なるのかを概観する(表 4)。ここでの成績は、子ども自身にたずねた自己評価の結果である。「上の方」「やや上のほう」と回答した生徒を「成績上位」、「下のほう」「やや下のほう」と回答した生徒を「成績下位」として示した。ここでは多くの項目で有意差が表れており、成績に直接的な影響を及ぼすであろう「勉強」時間の長短が、「勉強」以外の時間にも連動して差を生んでいる様子が示されている。

1)やはり、第一に指摘できるのは、「勉強」にかかわる時間の違いである。成績上位層は、「家での勉強(宿題以外)」や「学習塾」の時間が長い。家での勉強(宿題以外)は24.2分、「学習塾」は20.4分異なる。それに加えて、「学校」の

時間も長めであり、学習を中心とした生活を送っている様子が表れている。

2)これとは反対に、成績下位層は「遊び」や「メディア」などの余暇にかかわる時間が長い。とりわけ、「テレビ・DVD」の時間に大きな差があり、成績上位層に比べると23.6分多い。また、それ加えて、「人と過ごす」時間が長く、学習以外の活動が充実していることがわかる。

先に示したように、子どもたちの放課後の時間は4～5時間程度と限られていた。そのなかで「勉強」時間を確保しようとする、どうしてもそれ以外の時間を削る必要がある。このように時間は構造化されており、単に勉強時間を増やせば済むものではない。同時に勉強以外の時間をどう使うかを考えることも、限られた時間の活用という点では有効だと言えるだろう。

*

*

*

④小括

本項では、性別、地域別、親の学歴別、成績別に、中学生の時間の使い方がどのように異なるのかを、平均時間を用いて検討した。ここからは、以下のような傾向が見出された。

第一に、地域別（特別区・指定都市—人口 5 万人未満）のデータは、性別（男女）、親の学歴別（大卒—非大卒）、成績別（上位—下位）の 3 つのデータに比べて、時間の使い方の分化に大きな影響を与えていない様子が読み取れることである。睡眠や食事などの「生活」にかかわる時間だけでなく、「遊び」「メディア」「人と過ごす」「その他」にあるような個人の嗜好によって左右されやすい自由度の高い活動についても、あまり差異は見られなかった。中学生の生活が、地域によらずある程度均一化されているのかもしれない。

しかしながら、第二に、「学校」と「勉強」にかかわる項目では有意な地域差がみられた。地方では「学校」にいる時間や「家での勉強（宿題）」の時間が長く、学校の学習の比重が大きい。これに対して、都市部では、「家での勉強（宿題以外）」と「学習塾」が長く、校外学習の比重が大きい。学校や校外学習機関の果たす役割が、地域によって異なることが推測できる。

第三に、性、親の学歴、成績の 3 つの変数は、時間の使い方の分化に大きな影響を与えているようだが、その影響の仕方は異なる。性は比較的広範にわたって有意差が見られる。

「勉強」においても好む勉強方法が異なっており、男子は学習塾、女子は家庭学習の時間が長い。しかし、「勉強」トータルでは女子が 6.2 分多いだけで大きな差になっておらず（有意差はあるが、危険率 10% 水準の弱いもの）、「勉強」と余暇の時間（「遊び」や「メディア」など）のどちらか一方が大きいという関係ではない。むしろ、余暇の時間のなかで嗜好による分化が生じているようだ。男子は「遊び」を好み、女子は「メディア」「人と過ごす」などを好んでいる。

これに対して、第四に言えるのは、親の学歴と成績の 2 つの変数は、勉強と余暇でどちらか一方が大きいという関係になっている点に特徴がある。親の学歴別でみると、「勉強」は「大卒層 > 非大卒層」（32.5 分差）であるのに対して、「遊び」と「メディア」の合計は「大卒層 < 非大卒層」（36.0 分差）という関係である。成績別の結果も、これとほぼ同様である。「勉強」は「上位層 > 下位層」（42.6 分差）であるのに対して、「遊び」と「メディア」の合計は「上位層 < 下位層」（48.3 分差）である。

親の学歴と成績の相関は高い。大卒層は、成績上位 54.8%、成績下位 16.9% であるのに対して、非大卒層はそれぞれ 32.1%、34.9% である。2 つの変数はかなりの部分で重なっており、大卒層に特徴的な行動が、最終的に成績差になって現れている可能性が高い。

以上、4 つの変数に注目して分析を行ったが、このほかにも子どもたちの活動の分化に影響する要因があるに違いない。個々の子どもたちの活動の差は、こうした変数の掛け合わせで生じている。ここではもっとも単純に平均時間の比較を行ったが、変数間の関係も整理したうえで、どのような変数がより活動の分化に影響を与えているのかを慎重に検討する必要がある。さらに、平均時間や時刻別行為者率のような量的な側面だけでなく、その時間がどのように使われているのかといった質的な面も考慮する必要がある。

そこで、次節では、勉強時間を取り上げ、成績をより強く規定するのは勉強時間の量なのか、それとも勉強スタイルのような質なのかを考察する。

第 4 節 勉強時間の影響——成績を規定するのは勉強時間か、それとも勉強スタイルか

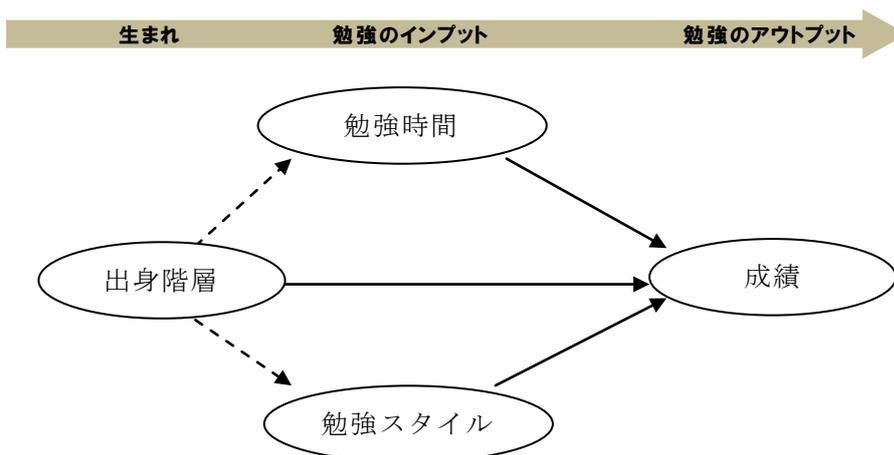
(1) 問題関心

教育社会学において、学校外の勉強時間（以下、勉強時間と表記）は努力をあらわす指標とされてきた。M. ヤングの「業績＝知能＋努力」の公式に従えば、勉強時間の量で測定されうる個人の努力が業績を押し上げることが予想される。ところが、荻谷（2000）は、ほんらい平等であるはずの努力量に階層差があることを高校生対象の調査データから明らかにしている。最近では耳塚（2007）が、都市部の小6生の算数学力が勉強時間から正の有意な影響を受けていること、しかし保護者票より得られた家庭背景要因を考慮することによってその影響力はかなり弱まることから、勉強時間は家庭背景要因の代理的な変数であると解釈している。

個人の努力は成績向上に寄与しないのだろうか。出身階層をコントロールしたうえでも、なお勉強時間が成績を向上させるとしたら、その効果や影響範囲はどのようなものだろうか。あるいは、そもそも勉強の成果は時間量だけで決定するわけでもなさそうだ。たとえば、勉強のタイミングや勉強に対する姿勢など（以下、勉強スタイルと表記）によっても異なることが予想される。以上のような関心から、本節では、勉強時間と勉強スタイルが成績に与える影響を検討する。そのさい、冒頭に挙げた先行研究の知見を踏まえ、出身階層の影響（出身階層から成績への直接効果、および出身階層から勉強時間、勉強スタイルを媒介とし成績へとつながる間接効果）にも注意を払いながら分析をすすめる。

分析の枠組みをまとめれば、図 11 のようになる。実線矢印（勉強時間、勉強スタイル、出身階層が成績に与える影響）については第 4 項で、破線矢印（出身階層が勉強時間、勉強スタイルに与える影響）については第 5 項で検証を行う。

図 11 分析の枠組み



注 1) 実線矢印（勉強時間、勉強スタイル、出身階層が成績に与える影響）については、第 4 項で検証。

注 2) 破線矢印（出身階層が勉強時間、勉強スタイルに与える影響）については、第 5 項で検証。

(2) 本調査データを用いる意義と限界

以下の分析では、子どもの 1 日の行動記録のうち学校外で行った勉強時間（学校の宿題、

宿題以外の勉強、学習塾の時間の合計。以下同) の回答結果を成績に対する重要な説明変数として用いる。既存の調査研究では、ふだん学校外で行っているだいたいの勉強時間をたずねたものがほとんどである。それに対して本調査データは、15 分刻みの行動記録から算出されたものであるため、より子どもの実態にそくした勉強時間を把握することができる。さらには、いつ勉強しているのかも判別可能であるし、意識に関する設問からは勉強に対する姿勢など(つまり、本節で着目する勉強スタイル)もとらえることができる。

子どもの勉強時間や勉強スタイルを詳細に把握できるという強みがある一方で、目的変数となる学習成果の指標としての成績の扱いには配慮が必要と思われる。分析では、目的変数として、子どもたちのクラス内における成績の自己評価(5段階)を用いる。したがって、相対的かつ主観的な評価であり、客観的に測定された学力とは異なる。このことに伴う問題を最小限にとどめるため、成績の回答結果に影響することが考えられる子どもを取り巻く学習環境の差異ができるだけ小さくなるように、以下の分析では、サンプルを公立学校に通う中学生に限定することにした。

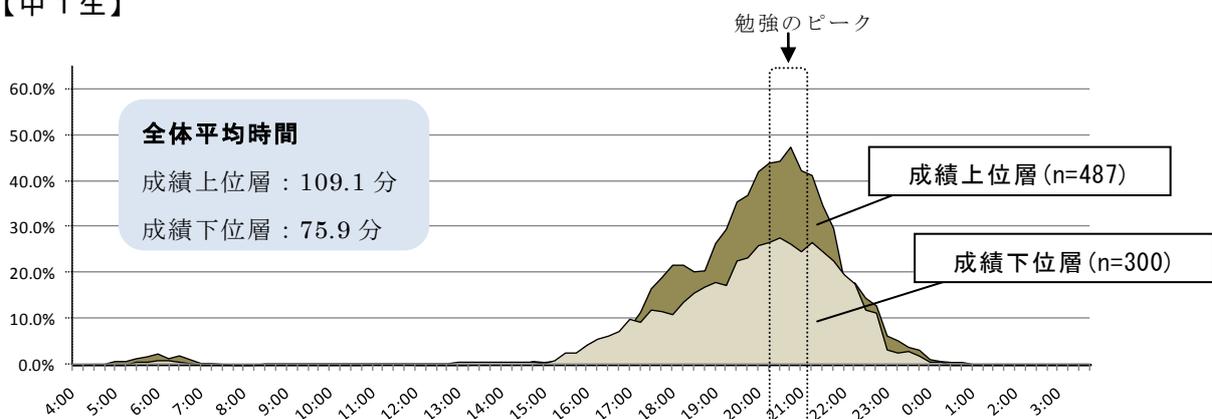
(3) 成績層別にみた子どもの勉強の実態

図 12 は、成績上位層(「上のほう」+「やや上のほう」の合計、以下同)と成績下位層(「下のほう」+「やや下のほう」の合計、以下同)とにわけ、各学年の子どもが勉強にあてる時間の実態を示したものである。それぞれの図形の高さは、各時刻で勉強している子どもの比率(時刻別の行為者率)をあらわしている。また、それぞれの図形の積分(面積)は勉強時間の平均値をあらわしている。

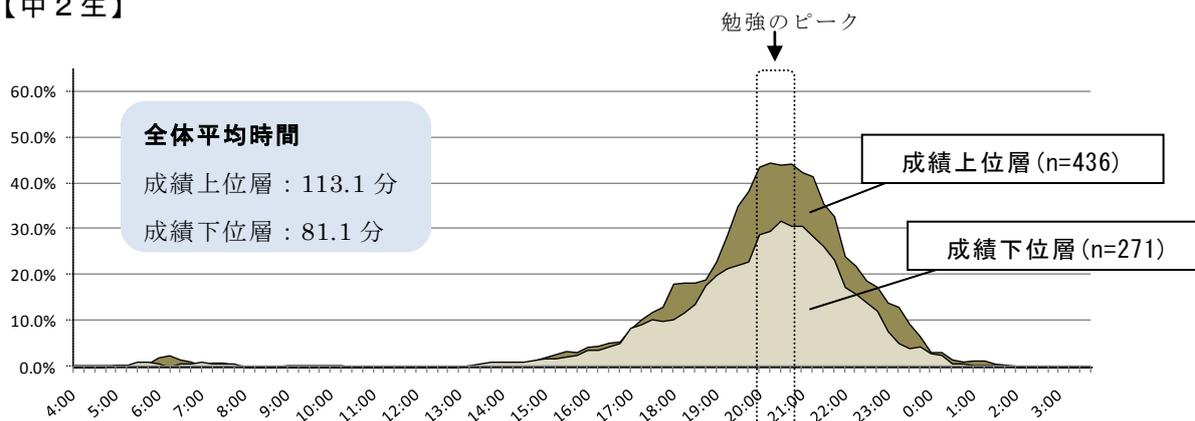
ここから、どの学年でも、夜 21 時前後に勉強の行為者率のピークがあること、また、成績上位層の図形の面積が成績下位層の図形の面積よりも大きいことから、成績上位層ほど勉強時間が長いことがわかる。さらに、以上に加えて視覚的に確認される特徴としては、とりわけ中 3 生において、成績上位層ほど朝に勉強していること、夕食(各学年とも夜 19 時ごろ)前に勉強していることなどがあげられる。これらの勉強のタイミングが、勉強時間の量とは独立に成績に対して効果を持つものなのか、それとも勉強時間の量に回収されてしまうものなのかは、分析手法を変えて、さらなる検証が必要と思われる。

図 12 中学生の勉強の時刻別行為者率(成績層別)

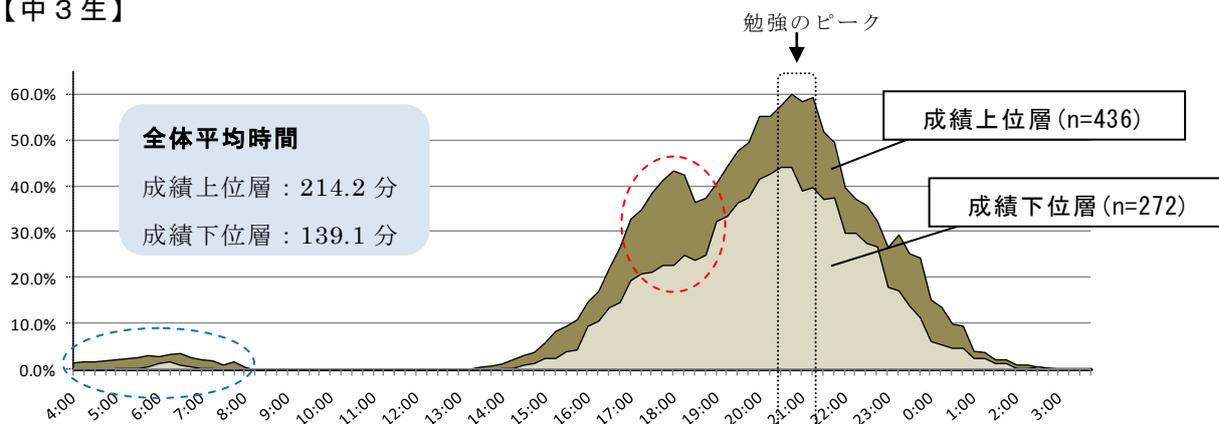
【中 1 生】



【中 2 生】



【中 3 生】



注 1) 現在のクラス内での成績を 5 段階でたずねた設問で、「上のほう」「やや上のほう」と回答したグループを「成績上位層」、「やや下のほう」「下のほう」と回答したグループを「成績下位層」とした。「真ん中くらい」と回答した「成績中位層」は図に示していない。

(4) 重回帰分析

以上の探索的分析を踏まえ、ここでは子どもを取り巻くさまざまな背景要因（親の学歴や居住地、通塾の有無など）をコントロールしたうえで、勉強時間や勉強スタイルが成績に影響を与えうるかを検証する。表 5 に示したのは、成績を目的変数とした重回帰分析の結果である。本報告の目的から着目すべきポイントは、勉強時間と勉強スタイル（以上、薄いアミカケ部分）、そして出身階層（濃いアミカケ部分）が成績に与える効果である。まず、勉強時間について見てみると、中 1 生では 10%水準、中 3 生では 1%水準で正の有意な効果を持つものに対して、中 2 生では何ら効果を持たない。次に、勉強スタイルについて見てみると、中 1 生と中 2 生では自律学習と計画学習が、中 3 生では自律学習、および若干ではあるが朝勉強が成績に対してポジティブな効果を持つ。さいごに、出身階層の影響を見てみると、中 1 生と中 2 生では親学歴と美術館・博物館が、中 3 生では親学歴のみが正の有意な効果を持つ。全体的にみると、勉強時間は学年によって効果にばらつきが見られるが、勉強スタイルのうち、とりわけ自律学習、出身階層のうち、とりわけ親学歴といった変数が、成績に対して学年の差異を超えて影響している様子がうかがえる。

表 5 中学生の成績の規定要因 (重回帰分析、学年別、勉強時間：連続変数)

説明変数	中 1 生	中 2 生	中 3 生
	標準偏回帰係数 β	標準偏回帰係数 β	標準偏回帰係数 β
性別	男子ダミー 0.003	0.020	0.063 *
出身階層	親大卒ダミー 0.196 ***	0.134 ***	0.204 ***
	美術館・博物館ダミー 0.064 *	0.054 +	0.039
母就業 (基準：母専業主婦)	母常勤 -0.017	-0.095 *	-0.094 *
	母アルバイト・パート -0.002	-0.057	-0.020
居住地域 (基準：特別区・指定都市)	15万人以上 -0.022	0.016	0.019
	5~15万人未満 -0.014	0.007	0.015
	5万人未満 0.043	0.080 *	0.055
通塾の有無	通塾ダミー 0.105 **	0.117 ***	0.062 +
部活動加入の有無	部活動加入ダミー 0.058 *	0.060 *	—
勉強時間	勉強時間 0.060 +	0.046	0.122 **
	朝勉強ダミー 0.028	-0.004	0.059 +
勉強スタイル	夕食前勉強ダミー -0.020	-0.029	0.015
	自律学習 0.196 ***	0.197 ***	0.241 ***
	計画学習 0.135 **	0.150 ***	0.057
	決定係数 0.196	0.180	0.220
	調整済み決定係数 0.184	0.167	0.208
モデル適合度	p=0.000 ***	p=0.000 ***	p=0.000 ***
N	1021	957	959

注 1) ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .10$. 勉強時間と勉強スタイル、出身階層のうち、有意となった標準偏回帰係数を太字で示した。
 注 2) 親大卒ダミー (父母のうち少なくともどちらか一方が大卒 = 1、その他 = 0)、美術館・博物館ダミー (1年間に1日以上行く = 1、その他 = 0)。
 注 3) 朝勉強ダミー (朝 4 時 ~ 8 時までの間に勉強 = 1、その他 = 0)、夕食前勉強ダミー (夕方 16 時 ~ 19 時までの間に勉強 = 1、その他 = 0)。
 注 4) 人に言われなくても自分から勉強する、計画的に勉強する
 (「とてもあてはまる」 = 4、「わりとあてはまる」 = 3、「あまりあてはまらない」 = 2、「まったくあてはまらない」 = 1)。
 注 5) 薄いアミカケは勉強時間と勉強スタイルが成績に与える影響を、濃いアミカケは出身階層が成績に与える影響を示している。
 注 6) 中 3 生では部活動加入率が低く活動時間も短いため「部活動加入ダミー」を分析から省いた。

次に、努力をあらわす学校外の勉強時間の効果をより詳細に把握するため、勉強時間を連続変数としてではなく、5 分位のダミー変数として投入した。こうすることで、どのくらいの量の勉強時間が成績を向上させるのか、あるいは下降させるのかを判別できると考えたからである。重回帰分析の結果を表 6 に示す。勉強時間以外の投入変数に変更はないため、分析の結果は表 5 に示した重回帰分析の結果と大きく変化していない。表 5 の分析で、勉強時間が正で有意となった中 1 生と中 3 生について見てみると、中 1 生においては、勉強時間が中くらいの長さのグループと比べて若干勉強時間が長いグループにおいて成績が有意に高いこと、一方の中 3 生においては、勉強時間が中くらいの長さのグループよりも勉強時間が極端に短いグループにおいて成績が有意に低くなっていることがわかる。以上から、勉強時間が成績に対して有意な効果をもたらすといっても、その絶対量だけが成績を規定するわけでもないことがうかがえる。

表 6 中学生の成績の規定要因 (重回帰分析、学年別、勉強時間：5 分位のダミー変数)

説明変数	中 1 生	中 2 生	中 3 生
	標準偏回帰係数 β	標準偏回帰係数 β	標準偏回帰係数 β
性別	男子ダミー 0.010	0.025	0.066 *
出身階層	親大卒ダミー 0.194 ***	0.136 ***	0.206 ***
	美術館・博物館ダミー 0.063 *	0.055 +	0.042
母就業 (基準：母専業主婦)	母常勤 -0.015	-0.098 *	-0.093 *
	母アルバイト・パート -0.001	-0.062	-0.014
居住地域 (基準：特別区・指定都市)	15万人以上 -0.020	0.016	0.013
	5~15万人未満 -0.011	0.008	0.012
	5万人未満 0.048	0.083 *	0.054
通塾の有無	通塾ダミー 0.096 **	0.115 ***	0.058 +
部活動加入の有無	部活動加入ダミー 0.059 *	0.061 *	—
勉強時間 (基準：勉強時間③)	勉強時間① 0.018	0.071 +	-0.126 **
	勉強時間② -0.050	0.035	-0.029
	勉強時間④ 0.086 *	0.092 *	-0.016
	勉強時間⑤ 0.044	0.115 **	0.045
	朝勉強ダミー 0.028	-0.003	0.064 *
勉強スタイル	夕食前勉強ダミー -0.014	-0.036	0.016
	自律学習 0.202 ***	0.202 ***	0.237 ***
	計画学習 0.138 **	0.151 ***	0.057
	決定係数 0.206	0.187	0.224
調整済み決定係数 0.192	0.172	0.210	
モデル適合度 p=0.000 ***	p=0.000 ***	p=0.000 ***	
N 1021	957	959	

注 1) ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .10$. 勉強時間と勉強スタイル、出身階層のうち、有意となった標準偏回帰係数を太字で示した。
 注 2) 親大卒ダミー (父母のうち少なくともどちらか一方が大卒 = 1、その他 = 0)、美術館・博物館ダミー (1 年間に 1 日以上行く = 1、その他 = 0)。
 注 3) 朝勉強ダミー (朝 4 時 ~ 8 時までの間に勉強 = 1、その他 = 0)、夕食前勉強ダミー (夕方 16 時 ~ 19 時までの間に勉強 = 1、その他 = 0)。
 注 4) 人に言われなくても自分から勉強する、計画的に勉強する
 (「とてもあてはまる」= 4、「わりとあてはまる」= 3、「あまりあてはまらない」= 2、「まったくあてはまらない」= 1)。
 注 5) 勉強時間①~⑤ (各学年の勉強時間を 5 分位し、勉強時間が短いグループから順に設定した。基準は、中央の第 3 分位のグループ (勉強時間③))。
 注 6) 薄いアミカケは勉強時間と勉強スタイルが成績に与える影響を、濃いアミカケは出身階層が成績に与える影響を示している。
 注 7) 中 3 生では部活動加入率が低く活動時間も短いため「部活動加入ダミー」を分析から省いた。

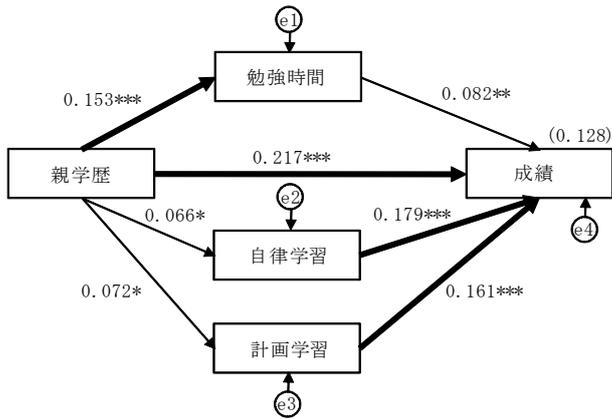
表 5、表 6 の重回帰分析の結果、子どもを取り巻くさまざまな背景要因をコントロールすると、勉強時間が成績に与える影響は学年によって異なるし、ひたすら長く勉強することが必ずしも成績向上に結びつくわけでもないことがわかった。また、本節の冒頭に挙げた先行研究の知見と同様に、さまざまな要因をコントロールしたあとでは、勉強時間の長さが成績に与える影響はそれほど強いものではないことがうかがわれた。その一方で、勉強に対する自律的・計画的な取り組み姿勢や朝勉強するなどといった勉強スタイルが、成績に対してポジティブな影響を与えていることがわかった。これは、勉強の量 (勉強時間) だけでなく、勉強の質 (勉強スタイル) のあり方が、成績に結びつくことを示唆しているように思われる。しかしながら、分析の結果、子どもの出身階層をあらわす親学歴の影響は、学年を超えて成績に対して正の有意な効果を持つことがわかるし、そもそも勉強スタイルじたいが出身階層に規定されているのではないか、という疑問も残されている。そこで次項では、パス解析を用いることで、これらの課題の検証を行う。

(5) パス解析

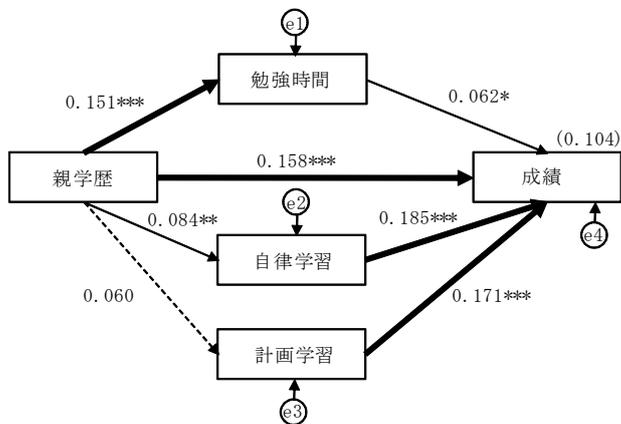
ここでは、図 11 に示した分析の枠組みを念頭に置きつつ、勉強時間と勉強スタイルが成績に与える影響を、出身階層が成績に与える直接効果だけでなく、出身階層から勉強時間、勉強スタイルを媒介とし成績に結びつく間接効果も踏まえながら、パス解析を用いて把握する。第 4 項の分析結果を踏まえ、出身階層としてはすべての学年で 0.1% 有意となった親学歴を、勉強スタイルとしては朝勉強、夕食前勉強、自律学習、計画学習の 4 変数のうち、成績に対して有意な効果を持つ変数のみを用いた。目的変数の成績、主要な説明変数の勉強時間については、表 5 の重回帰分析で用いた変数である。データは各学年に分割し、分析で用いるすべての変数についてリスト・ワイズしたものを用いる。

図 13 中学生の成績の規定要因 (パス解析、学年別)

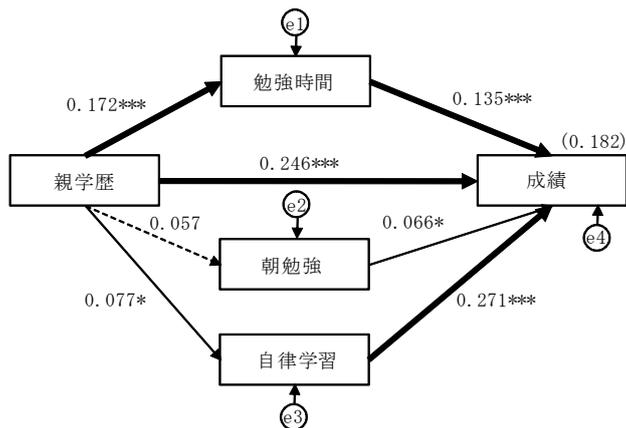
【中 1 生】 (n=1121)



【中 2 生】 (n=1048)



【中 3 生】 (n=1065)



注 1) 各パスの数値は標準偏回帰係数、() 内は重相関係数の平方を示す。

注 2) ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$ 。太字矢印は 0.1% 水準で有意なパスを、破線矢印は 5% 水準で有意でないパスを示す。

注 3) 勉強スタイルについては、表 5、表 6 で行った各学年別の重回帰分析で有意となった変数のみ投入した。

分析結果は図 13 の通りである。成績に引かれた 3 つのパスのうち、成績に対してポジティブな効果を持つのは、おもに親学歴を指標とする出身階層と、自律学習に代表される勉強スタイルであった。それらに比べると、勉強時間が成績に与える影響力は相対的に弱くなっている。このことは、第 4 項の重回帰分析の結果と一致する。次に本項の論点である出身階層（親学歴）から勉強時間、勉強スタイルに引かれたパスを見てみると、親学歴は勉強時間の上昇に対して一定の影響力をもつが、勉強スタイルに対しては正の有意なパスは確認されるものの、相対的に緩やかなものとなっている。このことは、勉強時間は階層変数との結びつきが比較的強く、どちらかといえば、出身階層の代理的な変数であると解釈されるのに対して、勉強スタイルは出身階層とはやや独立に、成績に対してポジティブな効果をもたらしていることを意味する。さらには、ここの分析結果からわかるように、勉強スタイルの成績に対する影響力の大きさは、出身階層の直接効果に匹敵する強さを持っている。以上の結果を踏まえれば、もし仮に、子どもたちの勉強スタイルの獲得を何からの形で支援することができるとしたら、出身階層という取り換え不可能な制約条件を超えて、子どもの成績の向上に貢献できる可能性が見出せるかもしれない。

(6) 考察

お茶の水女子大学研究グループが 2009 年に全国学力・学習状況調査専門家会議で報告した「家庭背景と子どもの学力等の関係」によれば、親の子に対する接し方が子どもの学力に影響を及ぼすことが明らかにされている。そのなかで興味深いのは、子どもの学力を目的変数、親の子に対する接し方を説明変数とした重回帰分析において、世帯年収を投入したときの各説明変数の標準偏回帰係数 β の変化である。すなわち、説明変数の多くは世帯年収を統制することによって β の絶対値が小さくなる。ところが「親が言わなくても子どもは自分から勉強する」という項目のみ、 β の絶対値がむしろ大きくなっている。この分析結果を受けて同報告は、『親が言わなくても子どもは自分から勉強する』家庭では子どもの学力は高いのである。これは、『親が言わなくても子どもは自分から勉強する』ようになるまで勉強の習慣を強化することの重要性を示唆している」としている。調査対象の違いはあるものの、この結果は、本節の分析から導かれたこと（出身階層からやや切り離された形で、自律学習などに代表される子どもの勉強スタイルが、成績向上にポジティブな効果をもたらす）と整合的であるように思われる。これは、どのように解釈（説明）することができるだろうか。

既存の社会学の理論と照らし合わせると、この結果は、やや奇妙に思えるかもしれない。たとえば、立ち居振る舞いや習慣などの身体化された文化的資本は親から子へ相続されるとされているし（文化的再生産論）、あるいはまた、「職業とパーソナリティ研究」では子どもの自律性（同調性の対極概念）を重んじる子育て価値を持つのは、やはり自律的な職場環境に身を置くホワイトカラーの親であるとされているからである。

出身階層（家庭）の影響からやや切り離されたルートで勉強スタイルが醸成されているとすれば、それは学校活動や地域社会の影響なのかもしれないが、いずれにせよ、成績向上に寄与していると考えられる勉強スタイルに着目し、その効果と形成メカニズムを解明することが、今後求められるように思う。今回、取り上げた勉強スタイル（自律学習、計画学習、朝勉強、夕食前勉強）はごく一部でしかない。本調査のデータの特性を生かせば、

たとえば「どんな時間単位で勉強しているか」や「勉強の前後にどんな活動を行っているか」といった観点から、成績に好影響を与えるような勉強スタイルを抽出し、データによる検証を行うことも可能である。これらは、今後の課題としたい。

<主要参考文献>

- 1) 浜野隆, 2009, 「家庭での環境・生活と子どもの学力」『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』ベネッセ教育研究開発センター
- 2) 荻谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究——努力の不等とメリトクラシー」『教育社会学研究』66:213-230.
- 3) 荻谷剛彦・志水宏吉(編著), 2007, 『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店
- 4) 吉川徹, 2006, 『学歴と格差・不平等』東京大学出版会.
- 5) 耳塚寛明, 2007, 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』80:23-39.
- 6) NHK 放送文化研究所編『日本人の生活時間・2005—NHK 国民生活時間調査—』『データブック国民生活時間調査2005』2006, 日本放送出版協会など
- 7) お茶の水女子大学研究グループ, 2009, 「家庭背景と子どもの学力等の関係」全国学力・学習状況調査専門家会議報告資料.
- 8) 総務省統計局『平成 18 年 社会生活基本調査報告』(第 1～7 巻) 日本統計協会、2008 など
- 9) 連合総合生活開発研究所編『子どもの生活時間調査報告書』1996, 連合総合生活開発研究所
- 10) 矢野眞和編著『生活時間の社会学』(1995 年、東京大学出版会)